

死と破壊から始まる観光

—アチェにおけるインド洋津波の解釈—

Catastrophe and Tourism: Interpretations of the Indian Ocean Tsunami in Aceh

齋藤 千恵*
Chie SAITO

Abstract

The 2004 Indian Ocean Tsunami devastated Aceh, Indonesia. Tsunami remarks and experiences have created a variety of narratives. A leaflet of tsunami tourism issued by the Indonesian government is one of them. Through an analysis of the leaflet, this paper examines what meanings the state gives the disaster and Acehnese tsunami experiences and how it depicts the past and future of their society in an elaborate Islamic context. I also discuss an implied meaning of the Acehnese independent struggle ended by the tsunami.

キーワード：アチェ、津波、観光、国家、宗教

1 はじめに

人は全て死を味わう。われは試練のために、凶事と吉事であなたがたを試みる。そして（最後は）われに帰されるのである（Tiap yang berjiwa akan merasakan mati. Kami akan menguji kamu dengan keburukan dan kebaikan sebagai cobaan. Dan hanya kepada Kamilah kamu.）¹⁾

これは、ウレレ地区の共同埋葬地の門に刻まれている文句である。ウレレは、2004年12月に起こったインド洋津波のグラウンド・ゼロと呼ばれる海辺の町で、スマトラ島のナングル・アチェ・ダルサラム州都バンダ・アチェ市の中でも最も津波被害が深刻であった地域である。津波直後の写真を見ると、海辺にあるモスクのみが残り、その周囲には建物が

*本学准教授、文化人類学（Cultural Anthropology）

なくなってしまうことが分かる。この町の被災者たちの話では、一家族に一人くらいの割合でしか、生存者はいなかったとのことである。もちろん、全滅した家族もある。

こうした大きな被害を生みだした地域に、被災者のための共同埋葬地が建設された。津波犠牲者のための他の共同埋葬地同様、個々の墓はない。大人の埋葬地と子供のそれが分けられているのみである。そして、埋葬地の敷地内には、津波で破壊され、廃墟となったコンクリート製の病院の建物が2棟、津波の爪痕をそのままに残されている。この埋葬地は、観光客が訪れる場所の一つになっている。

この門に刻まれている文言のように、イスラム教徒アチェ人津波被災者の多くが、津波被災を神から与えられた試練として捉える。イスラム教は、何故彼らの土地に津波が起こったのか、何故自分が生き残り、他の人が亡くなったのかを説明する。例えば、ウレレに住む30代の漁業従事者の男性は「津波は、我々にとって試練です。津波で亡くなった人は、天の神のもとに召されたが、我々は生き残った。悔い改める機会を与えられたのです。我々は、多くの罪を犯しています。私は、津波以前には、酒を飲み、麻薬を嗜んでいました。悔い改めねばならないのです」と言う。また、一人で復興住宅に住む40代の女性は、次のように言う。「何[どのような災害]が起こるかは、神のみが知っています。人は、頭であれやこれや想像するだけです。[中略]神が助けると決めたら、人は助かります。しかし、そうでなかったら、助かりません」。

人々は、彼らの運命が神により司られ、津波が神による試練であると解釈する。こうした解釈は、アチェ州観光局が発行した津波観光パンフレットにも見られる。被災地は、観光スポットとして紹介されるが、それは、ただの観光スポットではなく、津波被災と関連した物を通して、神の力が示された特別な場所として、未来との関連で描かれる。津波災害や人の生死は、宗教的枠組みの中で、意味を与えられるのである。

本論では、観光スポットとなった津波被災地に存在するシンボルの意味の分析を通して、津波被災とその後の復興、それに続くアチェの将来が、インドネシア政府によりどのように語られるのかを分析する。この際、その例として、津波災害の翌年に発行されたアチェ州観光局のパンフレットを分析する。

このパンフレットは、他の観光パンフレットの多くのものと同様に、文章と写真から構成されている。そして、他の観光パンフレット同様、選択された写真や文章が掲載されている。博物館や美術館で、物が特定の意図のもとに分類され、配置される(e.g. Clifford 1988、小川 2002:37) 様に、津波観光パンフレットを作ったアチェ州観光局は、何らかの意図をもって、それを作成しているのである。それは、単に、津波被害の大きさのみを示すためのものではない。事物の過去の姿を、現在や未来との関係で意味づける博物館展示(小川 2002:35 - 36)と同様のことが、パンフレットの中でもなされているのである。

2 津波とアチェ

ナングル・アチェ・ダルサラム州（以下、アチェ州あるいはアチェ）は、スマトラ島北部に位置する特別自治州である。²⁾ インド洋津波被災まで、アチェでは、自由アチェ運動が繰り広げられていた。各地で GAM (Gerakan Aceh Merdeka) と呼ばれる自由アチェ運動派とインドネシア軍の激しい戦闘が行われていたのであった。このため、身の安全を図って、他の地域に移っていった住民もいた。この戦闘で生まれた孤児たちは、かなりの数に上り、マレーシアの医療 NGO であるマーシィ・マレーシアが、孤児院を、津波被災地でなく戦闘の激しかったカユクーニン村に建てたほどであった。しかし、被災後の 2005 年に、平和協定が GAM と軍の間で結ばれ、戦闘は終了したのである。

この平和協定のきっかけとなったインド洋津波は、2004 年 12 月 26 日に起きた。インド洋沿岸の様々な地域に甚大な被害を及ぼし、インドネシアだけでも、死者・行方不明者数は、122,361 名 (UN/OCHA 2005a)、アチェ州だけで、113,306 名 (UN/OCHA 2005b) であった。また、アチェ州での全壊家屋数は、69,932 戸 (BRR 2005) である。

インド洋津波の威力とそれが起こした被害の甚大さは、津波発生後、繰り返し世界中に報道された。当時、テレビ画面には、プーケットに滞在していた観光客が撮影したビデオが繰り返し流された。こうしたビデオの映像を含め、津波被災に関する様々な映像、写真が、マスメディアを通して世界中に発信されていき、それに呼応するように、津波被災地には、かなりの数の援助団体が援助や救助に向かった。³⁾ インドネシア政府によれば、2005 年までに、インドネシアの被災地であるアチェ州とニアス島に訪れた国内外の援助団体は、400 以上に上る (BAPPEDA Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam 2005)。

被災地の一つであるアチェ州都バンダ・アチェでは、海岸線から 3km 範囲の地域が重大な被害を被った地域とされ、死者も多い。⁴⁾ 特に、海辺の町、例えば、ウレレでは、住民の 1/7 しか生存者はいなかった。また、バンダ・アチェを取り囲む形で広がっているアチェ・ブサール県でも、被害は甚大で、ランプウックという海辺の村は、死者・行方不明者は住民の 80% に達する。⁵⁾ 被災直後の写真を見ると、建っているのはモスクのみであった。ランプウックのみならず、その周辺の村々も、多くの犠牲者を出した。ランプウックからウラヤ村に続く道は、被災者の遺体で埋め尽くされたという。

人的、物的被害が多かったバンダ・アチェ市は、津波被災からそろそろ 5 年になる 2008 年現在、復興とともに、外部から人が移住してきており、活気を取り戻している。市中心部は、被災後、年を追うごとに、真新しい自動車やオートバイが増えている。津波以前は、高かった失業率も、津波後は、少し低くなっている。⁶⁾ 一方で、復興は都市計画も含み、道路の拡張工事のため、水道がいまだ復旧していない地域もある。仮設住宅もまだある。津波威力を示すものとして、廃墟となった建物や陸に運ばれた船などが、未だに見かけられる。この中には、観光局が発行するパンフレットに載り、津波観光の目玉として活躍して

いるものもあるのである。

3 津波観光パンフレット：津波と生と死の意味付け

バンダ・アチェに滞在している観光客が、ホテルの前に止まっているベチャやタクシーの運転手に、津波にまつわる観光地に行きたいと言えば、すぐさまいくつかの場所の名が彼らの口から聞かれる。こうして観光客が連れて行かれる場所は、例えば、津波犠牲者を葬った共同墓地があり、他に津波の爪跡が未だ見られるウレレ、海から5キロ離れたブンゲ・ブランチュット地区に運ばれたディーゼル発電船、ランプロ地区の家に乗り上げてしまった船である。ウレレでは、津波で唯一全壊を免れた建物であるモスクは、外国人観光客対策のために”Attention: You are coming into Muslim/Muslimah dress area（あなたは、イスラム教徒のドレスコードのあるエリアに入ろうとしています）”というインドネシア語とアラビア語の他に英語の文句を入れた看板を掲げるようになった。

こうした津波観光スポットのあるものは、政府観光局により、写真付きでパンフレットに載せられている。インド洋津波翌年に観光局から発行された『津波観光(Wisata Tsunami)』と題したパンフレットも、他の津波関係の写真とともに、こうしたスポットの写真のいくつかを掲載している。

(1) 破壊と死

パンフレットは、カラーで、八つに折った一枚の紙で出来ている。まず、表紙を広げると、見開き2ページに写真と文章が現れ、真ん中からこれを広げると4ページ続きの紙面に、幾つもの写真と文章が現れる。最後に、下側の紙の端をめくれば、8ページ分の紙面が現れるという仕組みになっている。

本で言えば序にあたる見開き2ページには、バンダ・アチェ市の被災後の様子を写した大きな写真が掲載されている（写真1参照）。写真の右上には、インドネシア語と英語で以下の様な説明が付ついている。

2004年12月26日の地震と津波の爪跡

バンダ・アチェとアチェ・ブサールにて

「ここがルブンだよ」とアガム・パラタは、グレ・ジュダ坂にあるルブンの仮設住宅の脇に車を止めて言った。リティンにあるキャンプには、ルブンを完全に破壊した災害の生存者約1200名が住む。バンダ・アチェから西へ20キロのところにあるこの地は、被災後、空と海からだけしかたどり着けなかったのであった… (Serambi Indonesia 2005, cited in Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam 2005)。

州都圏で発行される新聞の一節を引用した上記の文章は、バンダ・アチェ市を囲むように位置するアチェ・ブサール県の中で最も被害が深刻であったルブン郡の様子を描いている。写真は、廃墟となったバンダ・アチェのウレレの様子を写し出しているが、写真には表れていない、寸断された道路とそれによる居住地の孤立について、この文章で述べられているのである。被災者が他の地域に設営されたキャンプや仮設住宅に移らねばならなかった程、津波による破壊が大規模に生じたということが示されている。



写真1：パンフレット見開き

一方、写真は、今は住居建設禁止となってしまったウレレ地区のトンコルという集落の津波被災の様子を写したものである。廃墟となったトンコルの写真の中央には、白地に赤のペンキで「あなたは、ウレレ[地区]トンコル[集落]に入っています。何であれ、ここから物を持ち出すのは禁止です。トンコル青年団」と書かれた看板が大きく写し出されており、その左には、赤と白のインドネシア国旗がはためいている。背景には、海や島、それに白いポロシャツを着たりキャップを被ったいくつかの人影、手前には、津波で破壊された家々の残骸が写っている。

インドネシア国旗やトンコル青年団の看板、写真の後方に小さく映っている人々とのコントラストで、破壊の様子が強調される。小さく写っている人影は、その服装から、秩序が維持されているところから来た人々、あるいは、秩序そのものを表していると言ってよか

ろう。彼らの服装から被災者というよりは、援助機関の人々ではないかという推測も可能だろう。また、国旗が廃墟の写真の中央に写されていることにより、この壊滅的な状態に、国家が関心を向けていること、津波の被災者や被災地を保護する立場にあることが示され、それが、状況の深刻さを尚更物語るのである。国旗の傍らに設置された看板は、国旗が表す国家の秩序に関する強制力を利用していると考えられる。しかし、国旗や看板という秩序と関連する要素は、瓦礫ばかりの廃墟の様子に圧倒され、何とも無力に写し出される。この写真を真ん中から開くと4つのページが現れる(写真2参照)。この4ページの最初にある「イントロダクション」とそれ以降の章には、救助や援助の手が被災地へ入った様子が、被災の深刻さと共に描かれている。



写真2：次の4ページ

A. イントロダクション

2004年12月26日、明るい日曜の朝の静けさを楽しんでいた時、アチェは、地震とそれにより引き起こされた恐ろしい津波に襲われた。その強い衝撃から、この災害を、2004年の終わりにあった人類最大の悲劇と考えてよからう。この出来事により被災者が負わされた苦悩に、人々は同情した。被災者自身にとって、この出来事は、深刻な心理的、経済的、社会・文化的打撃をもたらしたのだった。

この大きな同情がこの国ばかりか世界中の人々の連帯を呼び起こした。彼らは、道義的および物的援助のためにアチェに押しかけた。アチェは一気に有名になった。膨大な人数のボランティアやドナー国による援助は、確実に被災者を助けた。

アチェ人の記憶に絡みついているその出来事を忘れてしまうのなら、それは、たわいないことである。大災害の名残りは、それを直接経験した人々の話に残るだろう。

それが、我々に示すものは何なのか？歴史は人類にとって、価値ある経験である。出来事を見返し、こうした災害の衝撃を、将来、最小限に抑え、更に人類が賢明になるよう、人類が過去か

ら学ぶことが期待される（Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam 2005）。

1 ページにわたるイントロダクションには、この様に津波の経験から津波後の援助や復興に関して、様々な特徴的な要素を盛り込んで書かれている。まず、生に満ちた平和な秩序として「明るい日曜日の朝の静けさ」と破壊や混沌をもたらした地震や津波が対比されている。その対比は、災害がアチェ人の予期せぬ時に、何の前触れもなくやってきたことを物語る。⁷⁾ そして、心理、経済、社会、文化という4つの言葉を羅列することにより、津波がアチェ人の生活全てに深刻な打撃を与えたことを示す。2004年の津波が「人類最大の悲劇」であったことは、世界中から寄せられた膨大な件数の援助と救助によっても示される。

続く第三段落目では、「直接経験した人々」という言葉を出すことで、個々に語られる個人的な体験や記憶を、集団的体験と記憶に対置させている。このパンフレットが製作された津波被災翌年の2005年は尚更、2年後でも、未だ人々の生活は被災から立ち直っておらず、被災地を歩けば、人々の生活に被災の事実が見られ、個々人の被災体験や復興にかけての思いが聞かれた。リアリティが、常に整理された言葉や表現には収まりきらない様に、被災地の様子は、集団的な表象では語りきれない状況であり、個別の語りであふれていたのである。

さて、このイントロダクションの最後の三文に注目しよう。ここには、過去の経験は価値のある経験であり、人類は過去から学ぶことが出来るという意味の文がある。一読すれば、それは、大災害を過去に経験したことにより、防災意識が高まったり、防災に関する研究が更になされたりして、将来、同じ災害があったとき、その被害を最小限に抑えることができる読むことができる。しかし、もう一方では、パンフレットの残りのページが示す様に、イスラム教的世界観の下での被災経験や、生死の意味づけがなされ、生の方向性が示されるのである。この方向付けのための生の意味付けは、次の章から始まる。

「イントロダクション」の右のページは、埋葬地の写真が連想させる死で始まる。三本のインドネシア国旗が立つ津波被害者の共同墓地の写真である。整然として静寂である印象を与える。国旗が三本立てられていることにより、通常の墓地とは異なることが分かる。つまり、パンフレットの最初に掲載された写真の様に、国旗により、墓地と国家を結びつけ、国家は、死者の眠りや死後の安寧をも守る存在として示される。また、国家の関心が向けられていることが示され、それにより、この埋葬地は、異常な事態で亡くなった人々の埋葬地であることを印象付ける。

この写真において、瓦礫に混じって遺体がある被災直後の混沌とした状況での個々の死は、遺体があるべき場所に納められた、整然とした抽象的な死となって表わされる。この意味は、その隣に載せられている仮設住宅の写真と比べると際立つのである。

埋葬地の写真の隣には、手前に瓦礫と大きな水溜りが写った仮設住宅の写真が載っている。また、瓦礫と水が写った仮設住宅の写真は、生存者の生活が混沌としている中で営まれており、前途多難であることを物語る。しかし、一方で、整然とした埋葬地を静とすると、仮設住宅の写真は、生者の生活から来る動を表しているとも言える。この二つの写真は、正反対の写真であるが、いずれも、災害の大きさを物語るものだろう。共同埋葬地と仮設住宅の写真には、以下の文章が添えられている。

B. 地震と津波の爪跡

この地域を襲った地震と津波の脅威の跡はたくさんある。そうした名残は、[残存する]宗教施設や共同墓地、波で洗われた物といった形で見られる。こうした爪痕は、唯一の主の力と比べると人類の存在を本当に小さなものとする。

例えば、実際に[被災後も]何ともなく立っている宗教施設の建物は多い。その一方で、その宗教施設の周りの地域は、全滅している。例を挙げれば、ウレレのバイトゥラマンモスクやランプウックのラーマトゥラーモスク、[海から陸へ流されていき]プングにある PLTD アンブン号といったものである (Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam 2005)。

上記の写真は、この説明文により、イスラム教と結び付けられる。大災害は、その周囲を全滅させた。それが、津波で亡くなった人たちのための埋葬地と生活を破壊された人々のための仮設住宅で表わされる。一方、これとは対照的に、モスクのみは、被災から免れている。ここで、奇妙なのは、モスクに混じって、ディーゼル発電船である PLTD アンブン号の名が出てくることである。この船は、津波により海から陸へ運ばれた道筋で、いかなるモスクも破壊しなかったと言われる船で、そのためにここで言及されているのだろう。神の家としてのモスクを通して、イスラム教的な津波の意味が、ここではほのめかされるのである。

実際に、グランド・ゼロと言われたウレレ同様、村人の大半が亡くなったランプウックといったインド洋津波の直撃を受けた海辺の村々で、モスクが無傷ではないにしろ、修繕するのみで建て直す必要がない位の被害しか受けなかった事実は、アチェ人が記憶している限り最大の災害である津波を、イスラム教と結びつけざるを得なくさせている。こうした事実は、被災地でよく口にされていたものである。モスクの構造上、津波による破壊を免れたという分析もなされるが、そうした科学的な視点を、宗教的視点が覆い隠してしまう。津波は、自然現象として扱われるというよりは、宗教的な出来事として説明されるのである。では、何故、モスクが無事なのに、人間の営みが破壊されねばならなかったのか？ こうした疑問も、宗教的な文脈では浮かび上がる。それへの答えは、次のページに示されるように、自ずとイスラム教徒の間では（あるいは、熱心なキリスト教徒からも）出される

ているのである。

(2) 多様な被災体験とイスラム教

次のページには、被災後のバンダ・アチェの様子を写した白黒写真が 36 枚載っている。写真の小ささと数、モノクロという色のため、ここに掲載される写真は、過去であり、被災後間もなくの被災地での救助や避難、被害の様子など多様な様子を記録したものと解釈できる。このうちの 10 枚に、町中に流された船が写っている。中には、写真のサイズが小さいため、よく目を凝らさないと、船だと分からない写真もある。近代的なホテルや会社のビルの前に、日常では水に浮かんでいるはずの船が、水という文脈を離脱して、被災地の陸と結びつくことにより、あたかも難破したように見える姿は、日常とは乖離した情景として映る。また、船がどこまで運ばれたかということにより、どこまで、津波被害があったのかということも分かる。これらの船は、陸に乗り上げてしまい、もう機能しないものとして存在する。陸地にあることで、津波災害という文脈に置き直され、災害のシンボルとなっているのである。

他の 3 枚の写真では、自動車や大型トラックが奇妙な具合に傾いて、そのまま止まっている。これらは、船の写真と同じく、津波災害という文脈の中で、海からの水の威力を語る物として表わされる。こうした写真は、ひょっとしたら、交通事故の写真である可能性もあるのだが、文脈が意味を規定するのである。人々が写っている写真も同様である。中には、何の写真であるかよく分からないものもある。しかし、他の写真や説明文との関連で設定された津波被災という文脈の中で、写真に写っている人々は、被災者か援助団体の人々として特定される。

これらの写真の真ん中に、アチェ語とインドネシア語で、「ああラッパナ、我らの主よ、我らを生かし給え、我らの罪を赦し給え、我らを試みに引き給わざれ、ラッパナよ」というイスラム教の祈りが据えられている。キリスト教の主の祈りの一部に似たこの祈りは、イスラム教徒が毎日の祈りの際や特別の場合に唱える一般的な祈りの文句である。この祈りにより、津波は試練として表わされる。津波による死を含む破壊や生が、ここに掲載される祈りにより、試練と罪という言葉で、イスラム教の文脈の中に入れられていく。36 枚の写真によって表現される多様性、そして、それに連なる個々の生と死は、漠然と、宗教的で集合的な生死の中に回収されるのである。こうして、パンフレットは更にイスラム教的文脈を絞り込んでいく。この絞り込みは、科学的な考え方も呑み込んで展開される。

4 ページ分を見終わり、更にパンフレットを開くと、次の紙面にも幾つかのセクションと写真が掲載されている（写真 3 参照）。

C. ストーリー

我々が、地震と津波のインパクト[の結果]を直接経験した被災者に尋ねれば、ひどく恐ろしい出来事の裏話がいくつも流れ出すだろう。ユニークな話から、奇妙だったり、合理的ではないものまで。しかし、その話は本当に起きたことなのだ。その他に、被災者たちが経験した悲しみにまつわる話もある。

こうした話は、我々に、生の重要性を意識させる。人類は、全能の神の力と権威の前には何の意味もないものとなる (Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam 2005)。

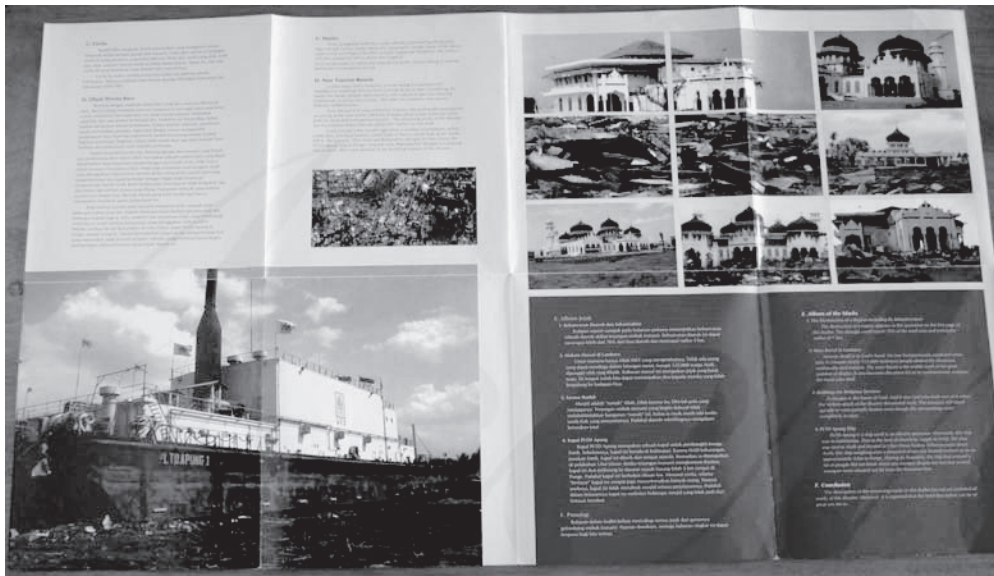


写真3：最後の8ページ

この「ストーリー」と題する章には、「奇妙な」とか「合理的でない」という言葉があり、津波自体を一つの超自然的力が働いた経験とほのめかしている。「合理的ではない」という表現を通して、津波被災時の体験の中には、自然界の秩序に表れる原因と結果の連鎖や科学的な意味での論理では解決できない事柄も含まれていることを示している。呪術的あるいは宗教的に原因と結果の繋がりが表現される話は、ここでは、「合理的でない」のである。こうした言葉は、特定の宗教的イデオロギーを共有しない人々、あるいは、非イスラム教徒を意識して使用されたとと言えるだろう。

実際、被災地では、イスラム教に結び付けられたり、そこまで明確な結び付きは示されないまでも、神秘的なベールを纏った話がいくつも語られている。こうした話の中には、個人の体験として語られる話もあるが、それらはここには掲載されていない。ただ、多様性について、漠然と言及されているのみである。

そして、こうした多様な話は、「本当に起きたこと」として、一まとめにされている。どのように「奇妙」で「合理的ではない」話なのかということは語られない。しかし、超自

然的存在が起こした奇跡的な出来事に類するポジティブな価値を有する話であることが、この章の最後の3文で推測できる。次の文では、これとは正反対に、否定的な意味で被災者の感情をかき乱すような体験もあることを示す。これは、文中にある「悲しみ」という表現から、身近な者の死など喪失体験が主要なものであると考えられる。しかし、一方で、こうした体験は「奇妙な」「合理的ではない」ものとしては表わされない。つまり、亡くなった者は、運命のままに亡くなったのであり、そうでない者、あるいは、救われた者（物）は、神の特別な意思あるいは恩寵によることが暗示されているのである。

こうした被災者による様々な話は、「生の大切さを気づかせる」話として、ここでは翻訳される。この「生」という言葉が、全知全能の創造神を持つ宗教の文脈に位置づけられる時、災害による生死も唯一神の意思の下での出来事として意味づけられる。パンフレットの次の章でも、イスラム教に固定された文脈そのままに、非イスラム教徒をも巻き込んだ津波後のアチェの可能性が論じられている。

(3) 津波観光

「ストーリー」に続く「新しい観光リゾート」という章では、もともと失業率が高かった地域で、世界規模に展開される新たな産業の可能性が言及されている。ここでは、観光産業は、被造物である人間に神が与えた特質と密接に結び付けられ、次の様に述べられている。

D. 新しい観光対象

全能の神の他の創造物とは違い、人類は、知性を与えられた。この知性は、知りたいと感じさせる強い欲求を持たせる。この知的な欲求を満足させるために、人がある場所から他の場所へ移動することは珍しくない。この移動は、旅という形となる。現代のコンテキストでは、楽しみながら新しい経験[学習体験]をする目的での、知的好奇心を満たすための旅は、観光活動と呼ばれる。こうした活動は、サービスに基づく新しい産業の一種、つまり、観光産業を産み出した。

観光産業の観点から見ると、2004年が終わろうとする頃に起こった地震と津波は、国内の観光客だけではなく、海外からの観光客を対象にする様な、アチェ観光発展のための追求すべき新しい可能性である。津波の残した爪痕は、それがもたらした結果とともに、大変貴重なもので、観光客がアチェという地域に出会う機会として機能する財産である。この災害の恐ろしさを証明する事物や行方不明者の総数は、疑いようもないものである。広域に渡って破壊された地域も多く、そうして全滅した地域には、モスクのみが残されているのである。

津波が観光客の関心を引きよせるだろうことの証明は、過去の時点で明らかだった。津波から数ヵ月後に、国家首脳やアーティスト、それに国内からの観光客が、津波の爪痕を見るという目的のためだけに、アチェを訪れたのだ。彼らは、ウレレのバイトゥラヒムモスクやブンゲにある

船、PLTD アンブン号、ランブロー帯やランブウックのラマトゥラーモスク、そして、その他の津波の爪痕を見学した。彼らは、この地域に起きた津波のこうした恐ろしさを見て驚愕していた (Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam 2005)。

ここでは、津波災害自体は不幸な出来事であるものの、アッラーが創造した人間の性質から生まれてくる行動と、津波を経験した土地が結びつくことによって、それが、アチェの新しい経済的リゾースとなる可能性となることが述べられている。これは、貧困から脱する手段の可能性でもある。この津波観光の可能性は、被災後、世界各国から、地位のある人々や有名人が当地を訪れたことで証明されているのである。実際、少なくないアチェ人たちが、こうした外国からの訪問客、特に、社会的に地位の高い人々が自らの土地を訪れることを名誉なことだと考えている。津波は、一般的に、人々の生活を破壊したネガティブな現象とも捉えられているが、復興や新しい産業をもたらすことにより、その意味が変換される。津波は、生者に生活の糧を与え、社会を繁栄に導くという可能性をもたらすのである。そして、この可能性は、取りも直さずアッラーが計画した人間の性質に基づいているのである。こうした新しい可能性が示された次には、再び破壊と死のシンボルが提示される。

(4) 破壊と死に続く救済

上述の二つの章の下に、津波被災後のバンダ・アチェの航空写真が掲載されている。小さくて、分かりにくいものの、写真の手前には、建物が無くなってしまった様子が見て取れる。この下のページには、ブンゲにある発電船が大写しになっている。この写真の右端背景に写る家のトタン屋根や木と比べるとこの船の大きさが分かる。八つ折になっているパンフレットの2ページを割いて船の写真を掲載することにより、この船が、津波観光に関して、重要な位置にあることが分かる。モスクも同様である。いくつかのモスクが、船と同じスペース分を使って掲載されている。周囲に瓦礫が写っているものと瓦礫が片付けられた後のもの両方が載せられており、それらを比較することにより、モスク自体は、津波による被害をそれ程受けてはいないことが見て取れる。

こうした船とモスクの写真の後、これらの写真の説明文が現れる。

E. 津波の爪あとのアルバム

1. インフラストラクチャと一帯の破壊

明らかに、最初のページにある引用に見られる様に、津波の襲来のために、一つの地域が壊滅した。この地域で破壊されたのは、70%、5kmの範囲に及ぶ (Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam 2005)。

これは、前述の航空写真に関する説明であろう。この航空写真は、バンダ・アチェ市のそれである。おそらく観光客は、このパンフレットをバンダ・アチェで手にするであろうから、航空写真の示す場所もこの文章にある「地域」も、バンダ・アチェであろうことが分かるだろう。ここでは、被災地が海辺から5キロという範囲に広がり、破壊的打撃を受けたのは、バンダ・アチェ市の70%と、数字により、被災地の広さを示している。

津波による破壊の説明が終わると、パンフレットの最初の部分と同様、死のシンボルが出てくる。

2. ランパロの集団埋葬地

人の寿命は、全能の神のみぞ知る。約12万5千人のアチェ州の人々が創造主に召されるとは、そのたった数分前にも、誰も予測できなかった。集団埋葬地は、一般的な（津波の）爪痕である。ここは、我々が、彼[神]のもとに戻った彼らのために祈る場所でもあるのだ（Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam 2005）。

ここでも、また、数字が津波被害の大きさを物語る。125,000人という数を示すことにより、インド洋津波が史上最悪の自然災害の一つであることを示す。ここでの墓地は、そうした死者が眠る場所であるとともに、祈りという宗教的な活動が行われる神聖な場所であり、単なる死のシンボルではない。パンフレットの最初の部分と同じ、埋葬地というシンボルを用いているが、同じシンボルを用いていても、生と結びつくことにより、このシンボルの意味は異なったものとなるのだ。

また、「インフラストラクチャと一帯の破壊」という節とともに、この節は、数字の力により読み手に十分なインパクトを与える。こうして示された被害の大きさは、観光地としてのユニークな価値を、つまり、生者の経済的リゾースとしての可能性を、アチェの被災地に持たせる。そして、被害の大きさは、唯一神の力を示すことにもなるのである。

こうして示された神の力は、科学より上に位置づけられる。イスラム教において、神は全知全能として特徴付けられることもあり、神のみが、何が先に起きるのかを知っている、人は、いろいろ考えたり、心配するだけであると言説が、他のイスラム社会同様、アチェの被災者の間でしばしば聞かれる。アチェには、津波被災後、防災関係を始めとする様々な分野の専門家が訪れている。中には、津波が起こるしくみを科学的に説明し、津波に関するイスラム教的な言説を誤ったものとみなすグループもあった。こうした科学に対する批判をこのセクションは含む。現代社会において、地震を含めた災害の予測はできるものの、確実に起こるものとしての災害の警告はできないといった意味も、これに含まれるだろう。科学による予測は、人が考えるものであり、それは予測や推測でしかない。何が、

いつ、どこで起こり、何人が亡くなり、誰が亡くなるのかは、神のみぞ知るのである。

以上の節で絞られてきたイスラム教的文脈は、更に最終節に近づくにつれて絞られてくる。以下の節では、「奇妙な」あるいは「合理的ではない」話に含まれるだろう話が提示される。科学と対立するカテゴリーに入る話であろうが、科学や論理では説明できない実話として、ここでは掲載されることにより、人が作った真理としての科学では説明できない、神の意思が反映している出来事の話として示される。

3. 宗教施設

モスクは、神の家である。そのため、それを守るのは彼[神]でもある。あのような恐ろしい津波の襲来は、この「家」を全壊させなかった。壊れたとしても、部分的なものである。一方で、その周囲は、破壊し尽くされていた。

4. PLTD アンブun号

PLTD アンブun号は、発電目的で使用された船である。以前、この船はカリマンタンにあった。NAD[ナングル・アチェ・ダルサラム州]の電力供給不足のため、この船は、はじめの場所から持ってこられた。その後、ウレレ港に停泊した。津波が陸[アチェ]を襲った時、この船は、ブンゲまで、約4キロも陸を流れていった。この船は何千トンもの重さであったのに。聞いたところによると、「航行」していた間に、この船は、多くの人々を救うこともできた。しかし、奇妙なのは、この船は、その道すがら、モスクに当たることがなかったことだ。実際、その道すがらに、遠からずモスクがいくつかあったが、この船は、それらをやり過ぎしていったのである（Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam 2005）。

ここでは、津波の衝撃を緩和し得たモスクの建築構造が問題にされるのではなく、モスクは、「神の家」として、神の加護がある建築物として表わされている。また、船は、その「神の家」を破壊せずに陸に流され、また、人を助けたことで、神の意志のもとに、操縦されていたように描かれている。船が、津波により運ばれていく過程で、水に流されている人々をどのようにして救ったのかは述べられていないが、ランプロ地区の家の上に乗りに上げてしまった船のように、押し寄せる大水の中、船の上に人を乗せて助けたとも読み取ることができる。津波の際、こうした役割から見ると、アンブun号はパンフレットの中の他の船とは異なる意味を持たされているのである。モスクが神の偉大さや神聖さのシンボルならば、ヌーフ（ノア）の箱舟の話の様に、この船は神による救済のシンボルとなり、生者たちに、新しい社会を作る可能性を与えたと解釈できる。しかし、一方で、箱舟とのアナロジーにより、生と死の罪に関する意味付けがなされる可能性もあるのである。⁸⁾

こうして津波災害にまつわるシンボルに、ポジティブな意味を持たせた後、パンフレットは「結び」と題される章において、「このリーフレット中にある津波の爪あとに関する記

述は、その全てを含んでいない。しかし、この簡単な記述が我々の役に立つことを期待する」(Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam 2005) と述べることで終わる。この記述により、津波被災地の現実自体が観光客の解釈にオープンであることを示す。その一方で、マイナスをプラスに転じる現象として津波を捉えたパンフレットの記述を通し、津波がもたらした人的および物的損失とダメージが、経済的發展や信仰の強化あるいは回復を目的とした新しいアチェ社会の礎として暗示されるのである。

4 結び

災害の記憶を集団的に保存する手段として、被災した物や被災地の様子を写した写真が使用される。観光パンフレットにも、そうした写真が掲載され、情緒的な反応を誘う表現を用いた文章が添えられ、メッセージが伝えられる。実際には、多様であったはずの津波被災後の被災地の様子は、特定の意図のもとに語られ、多様な意味はコントロールされるのである。

ジュディ (2002:72) は、カストロフに関して、その犠牲者の遺体が、戦争などの悲劇の後の社会変化のために、社会に「捧げられる」と述べる。インドネシア津波被災地であるアチェ社会においても、同様のことが言えるだろう。津波観光パンフレットの中で、インド洋津波は、人類最大の悲劇をもたらしたものとして表わされる。その被害の大きさが描き出され、これは、世界中の人々に学ばねばならないものとして述べられる。これは、既に、世界中の国々から政治家や名士が来ることにより始まっているのだ。こうした意味で、アチェにおける犠牲者の死は、国際社会、ひいては、人類に「捧げられ」た死であるのだ。また、パンフレットで述べられている様に、津波被災により、アチェ観光という新産業が出現するのであれば、失業率が高かったアチェ社会に対しても、人智の及ばない神の意思の下で、アチェ社会に「捧げられ」た死とも言うことが出来る。

そうした死をもたらした津波は、パンフレットの中で両義的な意味を持たされる。その意味は、他のシンボルとの関係で、両方の極を行き来する。それは、破壊と死をもたらしたものであるが、新しい社会の可能性をもたらしたものであるのだ。こうした意味付けは、価値の二項対立において明らかになる。

ターナー(1977)に倣って、パンフレットの中に見られる対立的価値を、いくつかのセットに分類すると以下の様になる。二項対立を擁する各セットは、時間軸により分類した。このセットの左右にあるのは、対立的な価値であり、縦方向にあるのは、ホモロジーとして、同類項に入る価値である。このセットは、ファン・ヘネップ(1909)の儀礼の三段階の図式にも当てはまるであろう。第一のセットである津波発生時は、日常生活からの分離であり、第二のセットは、被災直後の被災社会に関するものである。この段階は、境界状態として解釈できる。津波により、家財を失い、衣食は配給されるもので賄われ、住む場所

は、急拵えのテントや仮設住宅であった。津波被災者によれば、被災者はすべて失い、「皆同じになった」ということであった。こうした生活の中、例えばウレレでは、一つの地区出身者の間で、助け合って生活したと言う。友愛の情に基づく関係は、被災後4年経った現在でも、家族を失った人々の間では維持されている。⁹⁾ また、三番目セットにあるアチェ社会の未来は、統合の段階として、被災経験を経た人々が日常生活に戻る段階と言えるだろう。

津波発生時	被災直後	アチェ社会の過去と未来
秩序：混沌・廃墟	仮設住宅：共同埋葬地	(古い社会の) 死：(新しい社会の) 生
生：死	苦悩：安寧	人の家：神の家
明るい日曜の朝	動：静	高い失業率：生活の安定/新産業
の静けさ：津波	生：死	

まず、津波発生時のセットを説明しよう。津波が来る前は、「明るい日曜の朝の静けさ」としての整然とした秩序が存在する。人々はまだ生きている。しかし、津波発生により、破壊による混沌と死が生まれる。被災直後の第二のセットでは、人々は、避難所として設営されたキャンプや仮設住宅に住む。損失や喪失体験により、人々は苦悩の中にある。混乱の中、埋葬地と比較すれば、仮設住宅の中の生は、不安定であるが、躍動的な動という価値が持たされる。一方、亡くなった人たちは、パンフレットの写真で表わされる共同墓地に埋葬され、ここでは、静寂の中に、国家に保護された安寧がある。第三のセットは、アチェ社会の歴史に関するものである。津波前と津波後が対比される。新しい社会が生まれる予感に対し、古い社会は消滅する。この古い社会の消滅を象徴的に表わすのが、廃墟で表わされる人の子の破壊である。一方、神の家たるモスクは、そのまま存在し続けるのである。津波前の社会は、失業率が高い社会でもあった。一方、津波後の社会は、津波被災により新産業の出現の可能性が高くなり、安定したアチェ社会を望むことが出来るのである。

しかし、この解釈には、パンフレットの中に、繰り返し出てくる宗教的な表現に対する考慮が十分含まれていない。こうした表現は、信心深い人々の神を讃える言葉として、あまり意味のないものとして取ることもできる。その一方で、宗教的な文脈を敏感に感じ取る観光客もいることであろう。こうした人々にとって、パンフレットにおける津波と死は別の意味も持つだろう。

パンフレットでは、そこに掲載された祈りにより、津波は神による試練として意味付けられる。試練と罪が結びつくことにより、津波災害の宗教的原因をほのめかしている。更には、アンブン号の話を通して、パンフレットの中で、明示されていない意味付けがここでは可能となる。モスクを避けて流され、その流されていく途中で、人々を救ったという

アンブン号の話と似たヌーフ（ノア）の箱舟の話は、イスラム教徒やキリスト教徒の間のみならず、多くの人々に知られている。このアナロジーにより、人の死やアチェ自由運動が盛んであった津波以前の社会の死は意味付けられるかも知れない。ヌーフの箱舟の話では、大洪水により滅ぼされたのは、信仰のない人々で、生き残ったのは信仰のある人とその家族なのである。こうした話をここで、援用すれば、古い社会は不信仰な社会であり、新しい社会は信仰のある社会とも意味付けられる。

しかし、こうした意味付けは、実際に、死者を多く出した被災地で語られている話における死者の位置づけとは異なる。被災者が語るのは、生者は、罪を多く犯した、つまり不信仰のため、神に悔い改めの機会を与えられた人々なのである。二項対立の中で、死者は、信仰のある者となる。被災者が語るこうした話と、政府が創り上げた津波の意味付けにおけるアチェの過去の意味付けは、一つの社会で、正反対の意味として存在するのである。

観光パンフレットの中で、津波はまた、アチェ社会とインドネシア国家の間の新しい関係をほのめかす。パンフレットの最初の部分にあるインドネシア国旗が立てられた廃墟と埋葬地の写真は、インドネシア国家が被災者の保護者であるという立場を示すものであった。そして、津波後、平和協定により終わりを告げた自由アチェ運動とインドネシア国家という対立的な概念を、不信仰と信仰の対立概念を取り込んだ第三のセットに放り込めば、罪の問題をも伴って、津波以前のアチェの歴史も位置付けられるのである。

しかし、一方で、復興過程にある社会では、被災者の間から、公務員の汚職や賠償金未払いなどの問題が指摘される。また、津波被災前の政府の横暴としか言えない行為に関しても人々は言及し、それは、NPOや国連の手により、世界中に発信されている。こうして人々の口から出るインドネシア政府への批判を考慮すれば、津波以前のインドネシア政府との闘争の歴史が、インドネシア国旗との関係やイスラム教的な文脈の中で如何に解釈されるのか、それは、パンフレットを見る者一おそらくアチェ以外の地域から来た人々であろうが一の手に委ねられているのである。

注

1) 埋葬地の門にあるこの文言は、アル・クルアーン預言者の章の35節からの引用である。門にある文言は、“merasakan”という言葉の中の“sa”という二文字が既に津波後四年にして欠けてしまっている。また、本論に載せた日本語訳は、日本ムスリム情報事務所のウェブサイトにあるクルアーンの日本語訳を載せた。

2) 2000年に、イスラム法が導入されたが（Bagian Hukum Sekretariat Daerah Kabupaten Aceh Besar 2006:16）、本格的にアチェ人イスラム教徒の間に定着したのは、現地のインフォーマントによると、津波以降、GAMとインドネシア軍との闘争が鎮まってからのことであるという。

3) 津波被災地に対する欧米の関心は、“White Death”によれば、世界に繰り返し報道されたブーケット

の白人観光客による津波映像が影響しているという。欧米からの観光客が多いプーケットで災害が起こったことにより、他人種の悲惨な死にはあまり関心を注がない白人たちが、自分たちの身にも降りかかりうる災害であると捉えたことが、一因としている (Olds, Sidaway, and Sparke 2005)。

4) 本論で扱う観光パンフレットには、バンダ・アチェ市は海岸線から 5km の幅で被災したとある。

5) 1/7 や 80% という数字は、当該地区の住民や NGO スタッフからのものである。国家統計局職員によれば、ウレレなど地区ごとの生存者数、死亡者数の統計資料はないという。津波前の地区ごとの人口、津波後の人口に関する統計調査はあるが、当時当該地区に居住していた生存者が、津波後も当地に居住しているとは限らない。特に、ウレレ地区は、道路拡張工事のため、未だ水道が復旧していないので、未入居の復興住宅が少なくない。

6) 津波前の失業率は、例えば、2003 年の場合、インドネシア全体が 9.5% だったのに対し、アチェ州では、11.2% と高い (BAPPENAS n.d.: 88)。

7) 実際には、一斉に浜辺から波が引き、魚が打ち上げられていたという津波の予兆はあった。しかし、当時の被災者たちのほとんどは、これが津波が来る前触れであるという知識はなかった。

8) この場合のアナロジーは、インターナル・アナロジーと呼ばれているものである。サピア (Sapir 1977:22) は、George the Lion (ライオン - ジョージ) と呼ばれているフットボール選手の例を出し、ジョージとライオンはどちらも、勇猛な性質を持つことから、ジョージとライオンの関係は内的アナロジーとなるとする。同様の関係がアンブン号とヌーフの箱舟の間に存在する。

9) しかし、実際にあったのは、助け合いの生活だけではない。ウレレ地区で報告された事例ではないが、ロイターによると、テントでの避難生活において、レイプやその他のセクシャル・ハラスメントも起きていたとのことである (ABC News 2005, ロイター配信)。

参考文献

小川 伸彦

2002 「モノと記憶の保存」『文化遺産の社会学』荻野昌弘編。Pp. 34-70。新曜社。

ジュディ、アンリ・ピエール

2002 「カタストロフィの記憶」斉藤悦則訳。『文化遺産の社会学』荻野昌弘編。Pp. 71-90。新曜社。

日本ムスリム情報事務所

n. d. 「預言者 (アル・アンビヤーウ)」『聖クルアーン』電子文書、
<http://www.isuramu.net/KURUAN/21.html>、2008 年 10 月 20 日閲覧。

ABC News

2005 “Sexual abuse ‘rife’ in Aceh tsunami camp.” ABC News March 26, 2005. Electric documents,
<http://www.abc.net.au/news/stories/2005/03/26/1332008.htm>, accessed on November 8, 2008.

Bagian Hukum Sekretariat Daerah Kabupaten Aceh Besar

2006 Kumpulan Qanun-qanun tentang Syariat Islam. (『イスラム法規範集』) Bagian Hukum Sekretariat Daerah Kabupaten Aceh Besar.

BAPPEDA Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam

2005 Donatur/NGO National-International: Yang Ikut Berpartisipasi dalam Kegiatan Rehabilitasi dan Rekonstruksi Provinsi NAD. Pasca Gempa Bumi dan Gelombang Tsunami 26 Desember 2004 (『国内国外ドナー/NGO: 2004年12月26日地震および津波後のナングル・アチェ・ダルサラム州リハビリテーションおよびリコンストラクション活動に参加したもの』). BAPPEDA Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam.

BAPPENAS

n.d. Indonesia: Preliminary Damage and Loss Assessment, the December 26, 2004 Natural Disaster. BAPPENAS.

BRR

2005 Aceh and Nias One Year After Tsunami. Banda Aceh: BRR.

Clifford, James

1988 “Histories of the Tribal and the Modern.” The Predicament of Culture. Pp.189-214. Cambridge: Harvard University Press.

Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam

2005 Wisata Tsunami. (『津波観光』) Dinas Pariwisata Provinsi Nanggroe Aceh Darussalam.

Gennep, Arnold Van

1960 The Rites of Passage. London: Routledge and Kegan Paul.

UN/OCHA

2005a OCHA Field Situation Report No.15. Jan.9, 2005. Electric document, <http://www.undp.org/cpr/disred/documents/tsunami/ocha/sitrep15.pdf>, accessed on November 7, 2008.

2005b OCHA Situation Report No.19. Jan.18th, 2005. Electric document, <http://www.undp.org/cpr/disred/documents/tsunami/ocha/sitrep19.pdf>, accessed on November 7, 2008.

Olds, Kris, James D Sidaway, and Matthew Sparke

2005 “Guest Editorial: White Death.” Environment and Planning D: Society and Space 23(4): 475-479. Electric document, <http://www.envplan.com/abstract.cgi?id=d2304ed>, accessed on October 30, 2008.

Sapir, David

1977 “The Anatomy of Metaphor.” The Social Use of Metaphor: Essays on the Anthropological Rhetoric. David Sapir and J. Christopher Crocker, eds. Pp.3-32. University of Pennsylvania Press.

